

豊庄だより



第 712 号 2022 年 6 月 13 日

私は、保育園で西日本新聞、自宅で毎日新聞を購読しています。スマホで情報を入手する人が大半を占めるご時世ですが、やはり（紙の）新聞は欠かせません。2紙をじっくり読むと、かなりの時間が必要になりますが、ページをめくっていくと、政治、文化、スポーツなど、いろいろなジャンルの記事に出

福岡市早良区南庄 2-26-13
社会福祉法人林生会豊庄保育園
園長 西尾 達

会うことができます。また、地方紙と全国紙の報道の仕方も比較ができます。

時には2紙以外の新聞も読んでみようかなと思いい、手にしたのが朝日新聞（4月29日付朝刊）でした。朝日新聞の一面には名コラム「天声人語」があります。600字くらいの文章は、いつも名文で、感心させられます。そして次の2面へ。ここには、現在話題となっている人物を紹介する「ひと」という欄があります。「非行の経験を生かして暴力団組員を研究・取材する作家」というタイトルに興味を惹かれました

非行の経験を生かして暴力団組員を研究・取材する作家

ひと

ひろすえ のぼる
広末 登 さん(52)



なぜ暴力団に入り、なぜ辞めたのか。約20年間で延べ200人近い当事者から半生を聞き取った。組事務所を訪ね、店で酒を酌み交わしながら取材する。「ヤクザと介護」などの本や論文を執筆し、保護司として就労支援もする。福岡市出身。中学3年の夏、バイクを盗んで暴走し補導された。警察署で絞られた時、リーゼント頭の不良が手錠をかけられ泣きじやくる姿を見た。自分の将来を重ね「引き返すなら今しかない」。そう思っ立ち直ろうと決めた。道のりは険しかった。高校を中退して服飾業界で働く。「中卒だろ」と見下す同僚がいた。23歳で通信制高校に入り、大学にも進学したが、就職の採用面接で落ち続けた。知人からは「非行歴があるからだろう」と言われた。研究の世界なら非行経験を生かせるのではないか。方向転換し、大学院に進み犯罪社会学を専攻した。組事務所を取材し、元組員が運営する教会に住み込んだこともある。独自の調査を重ね、38歳で博士号を取得した。結婚や子どもの誕生を機に足を洗った組員らにも接してきた。口座開設もままならず、みな苦労している。「セカンドチャンスがある世の中でなくては、裏社会に逆戻りしてしまう」。ふと、ヤクザになつた昔の友人の顔が浮かぶ。今は、真つ当な道を歩めているだろうか。そう案じながらまた筆を執る。

文・写真 加治隼人

た。しかし、惹かれるだけにとどまりませんでした。顔写真を見た時、「どこかで見たことのある顔だなあ」とまず思い、次に名前を見て、「あっ！」と思わず声が出ました。その名前は、「廣末登」さん。2年前、（私が属している）早良保護区保護司会のメンバーになられ（今は他の区の保護司ですが）、その時私は、年に2回発行する保護司会の機関誌（「更生保護さわら」）制作を担当していて（現在進行形ですが）、「新任保護司のあいさつ」というコーナーに廣末さんに書いてもらったことがありました。

その廣末さんが、地方紙でなく全国紙の「ひと」の欄に登場しているのに驚きました。本文を読むと、「福岡市出身。『ヤクザと介護』などの本や論文を執筆し、保護司として就労支援もする」と書かれていました。保護司という社会の表舞台になかなか登場しない仕事をよくぞ取り扱ってくれたと思いました。

廣末さんは著書も多く出されています。一番入手しやすいのは、『ヤクザになる理由』（新潮選書 2016年）、『だからヤクザを辞められない』（新潮選書 2021年）の2冊でしょうか。ぜひ、ご一読ください。

新潮新書 Brevity is the soul of wit, and tediousness the limbs and outward flourishes.

廣末 登
HIROTSUGU Noboru

だからヤクザを
辞められない
裏社会メルトダウン

再就職率3%
——これでカタギになれるのか

「暴力団博士」が危うい裏社会に
生きる男たちの肉声に迫る!

新刊
新潮新書